

私達の平和宣言

令和4年8月6日 広島

あの日から77年、あの時を過ごした仲間も、原爆の痕跡も、残るものはわずかになりました。しかし、あの惨劇に出遭った私達、子どもであった私達、さらにその子ども達もまた、長い苦闘の日々を忘れません。人間の残骸を、人であった塊を、有り合せの木切れで茶毘に付し、日々の糧を求めてさまよい、あるいは負傷者を助けながら、やがて自身も不可解なからだへんかたおいきのひとびとじんごぜつくとうかさこそだ体の変化で斃れていく。生き延びた人々は、人語に絶する苦闘を重ねながら子どもたちを育て、街の復興を成し遂げられました。そして日本全国で千を超える無差別爆撃は、60万人に迫る同胞を殺害しました。それは紛れもない「戦争犯罪」でした。

そして今また、ロシアはウクライナで無差別殺戮の戦争犯罪を実行しています。現代世界の平和と安全に責任を有する常任理事国が、不当な戦争を続ける理不尽は、私たちの信じた平和の秩序が崩壊し、国連が機能しない現実を見せつけました。リアルタイムで映し出される死傷者や破壊された建物は、あの日の私たちの姿と重なり、胸が塞がる思いです。

これは紛れもない戦争です。但し、ウクライナの戦いは、外国の占領に対して「自決の権利を行使して戦う武力闘争」であって、国際法が正当と認めるものです。他方、ロシアの核兵器使用の威嚇は、ロシア本土への反撃を防ぎ、戦闘がウクライナ領土に限定されるという侵略側だけが有利になる状況を作りました。このことは、昨年1月に効力が発生したと主張する「核兵器禁止条約」が、現実には如何なる効果も発揮しないという事実を突きつけました。そして今年6月の「第1回締約国会議」は、ロシアを支持する少数の加盟国が反発しただけで、ロシア批判が悉く排除された最終文書が採択され、反核の名に値しない会議であると印象付けられました。

参加した日本の被爆関係団体が、核恫喝には目を閉じて「文書が採択されたこと」自体を会議の成功だと喜び称え合う姿には、私達は大きな違和感を禁じ得ません。

翻って日本を取り巻く状況は、ウクライナと連動しながら悪化しています。核兵器を搭載できる中国とロシアの爆撃機の編隊は、威嚇的に日本周回、北海道周回を繰り返し、台湾の防空識別圏には最大で百を超える攻撃機編隊が侵入しています。北朝鮮は核兵器とミサイルの増強を続けています。ロシアに占領されたウクライナ国民は自由を奪われました。中国は、香港において、ウイグル、チベット、内モンゴルにおいて、おぞましい人権弾圧を続けています。このような国の脅威に晒される日本にとっ

て、対等の関係で平和を維持する安全保障には、独立国家固有の権利であって、国連憲章が推奨する、「集団的自衛権」の発展強化しか道はなく、憲法の改正は不可避です。「核兵器禁止条約」はすべての加盟国に、核兵器と関係物の全情報報告義務を課すため、日本が強化すべき日米同盟とは相容れず、日本の安全保障方策を根底から覆すのです。

脅威に曝された欧州は激変しました。中立国スウェーデンとフィンランドはロシアに對抗するために NATO に加盟して核抑止力の傘下に入ります。スイスですら NATO 加盟支持の世論が 30% を越える状況です。一方で「核兵器禁止条約」加盟国には、中国の、香港やウイグル弾圧を支持する決議提出国が 16 も含まれます。先に述べた「第 1 回締約国会議」で ICAN は言いました。「日本の被爆者は失望している。被爆者や他国の話を聞くべきだ」と。私達は言います「異民族弾圧を支持する国が多く加盟する核兵器禁止条約には失望している。私達のような被爆者や、NATO 依存を強めたドイツ、フィンランド、スウェーデンの話を聞くべきだ」と。もう幻想は終わりです。被爆者も様々です。広島市は「安全保障は国政で議論すべきものである」との公式見解を出しながら、それと裏腹の、日米同盟を棄損する「核兵器禁止条約」を推進する「平和行政」は不誠実です。被爆者である父母たちは、苦難を克服して見事な復興を成し遂げました。そのことに対し、私達は深い感謝を申し上げるとともに、幾多の犠牲者へ鎮魂の誠を捧げます。皆様の、苦難を克服する心とその努力は、私達が引き継ぎ、日本の現実的な平和と安全を強化させることを誓います。どうか安らかにお休み下さい。過ちは“繰り返えさせません”から。

平和と安全を求める被爆者たちの会

※ 令和 4 年 7 月 8 日、安倍元総理大臣が回復の願い空しく、凶弾に斃れられました。

我が国の安全保障と発展を最も重視された元総理のご意思の継続されることを願
い、謹んで哀悼の意を表します。